

【論文】

## 「単元の核となる社会的事象」を設定した社会科地域教材開発の一考察

— 小学4年生・静岡市を近代都市化した、海野孝三郎の静岡茶直輸出の具体的事例から —

大 西 洋

愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻

## 要約

本研究は、小学校社会科教育における地域教材開発について、一つのプロセスを提案することを目的とする。その概要は、小学校学習指導要領解説社会編から付けるべき力を把握し、単元の核・学術的根拠と社会に見られる課題のある「単元の核となる社会的事象」・具体的な単元の核となる社会的事象・単元目標を設定し、単元構想・展開へ繋ぐというものである。本稿で述べる事例では、これに加えて「人物」の設定も行う。地域教材を必要とする単元は、各地域に合った事例が教科書には記載されていないので、その開発は必然である。この「単元の核となる社会的事象」という言葉は筆者の考案であるが、その単元での学びに直結する社会的事象を正確に、且つ端的に少ない文字数で表現できるところが新しい。これを設定することが、地域教材を必要とする単元で、学習指導要領に準拠した「付けるべき力」を付けられる教材開発が行えることを検証した。

この「単元の核となる社会的事象」は、地域教材開発だけではなく、小中学校社会科のどの単元でも設定可能だと考えている。今後の課題は、それを検証していくことである。

## キーワード

地域教材開発, 学習指導要領, 地域の発展に尽くした先人の具体的事例, 単元の核となる社会的事象, 社会に見られる課題を把握して社会を考える学習

## I はじめに

本稿における筆者の主張を以下に挙げる。(1)地域教材を扱う単元では、教科書に具体的事例の記述がないが、公立小学校としては現行小学校学習指導要領解説社会編<sup>1</sup>(以下、指導要領解説)に準拠したものを作成すること。(2)本単元の学習内容を設定(教材開発)するに当たっては①前単元の学習内容(一般化された社会的事象と各地域特有の社会的事象が混同したものを取り扱う教材)と次単元の学習内容(全て各地域特有の社会的事象を取り扱う教材。地域との類似点は皆無ではない)との繋がりを意識すること、②①の繋がりに学習者の思考段階(第4学年)を考慮に入れること、③学校や地域の実態を生かしていくように意図すること。そして、これらを繋ぐものとして(3)「単元の核となる社会的事象」の設定を考案したこと。これは、授業者がその単元全体で指導する内容の要点を最小限に絞って把握するための概念で、「指導要領解説に準拠し、学術的根拠(先行研究等)に基づき、社会に見られる課題を含ませ、その単元で中心となる社会的事象を端的に表したもの」とする。

法的拘束力を有している学習指導要領は、教育課程の基準の大幅な大綱化や弾力化を図っている。これに対して、指導要領解説自体は法的拘束力を有していないとし

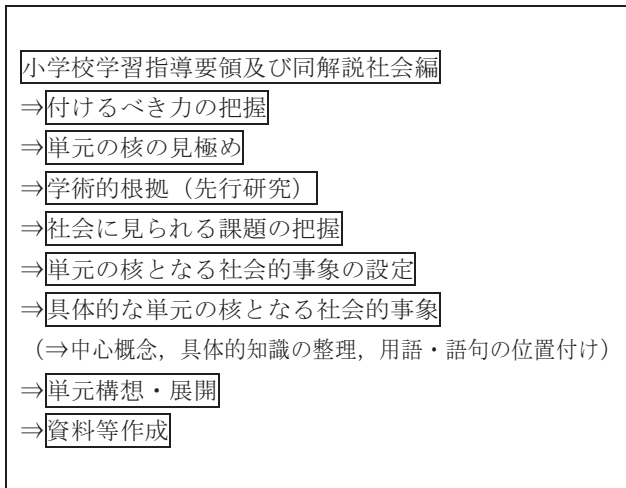
ても、学習指導要領の内容を具体化したものとして文部科学省が著作権を有しているのだから、やはり記述されている方法については準拠するべきであると考え。但し、記述されている事実についてはその限りではない。社会科という教科に対応する学問領域は歴史学、地理学、政治学、法律学、経済学、社会学、哲学、倫理学等、多岐にわたっており、それらの学問が科学である以上、常に実証的な研究によって事実(既存の通説)が新説によって覆されることがある。そして、学習指導要領が改訂される約10年間にそのような事態が起こることは十分に考えられる。そのため、事実については教員が調査・分析をし、必要に応じて指導要領解説の記述を改訂しながら授業を実践していかなければならない。

また、地域教材を慣例的に使用することは良くないことではない。教員の日常勤務の多忙すぎる点や、特に小学校の場合、社会科の授業を担当する教員が全て社会科教育を専門としているわけではない点を考慮すると、地域教材を年度毎に個々に開発するなどということは現実的ではない。教員は指導案作成(授業実践)で手一杯である。厳密に言うと、教材と指導案は別物である。教材は同一でも、指導案やそれに基づく資料の作成・活用は

学習者の状況によって変えていかなければならない。その単元に相応しい地域教材であれば、その慣例的な使用は、指導案検討にのみ取り組めば良くなるという点で、むしろ望まれるところではないだろうか。

一般的に教員は、単元展開を構成し評価規準を設定する場合に、指導要領解説及び『評価基準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料<sup>2</sup> (国立教育政策研究所教育課程研究センター)』を参照する。「単元の核となる社会的事象」の設定は、その単元での学びに直結する社会的事象を正確に、且つ端的に少ない文字数(単語(用語) + α)で表現できるところが新しい。教員にとっては教材開発・教材研究の両方における精選された方法の一つとして、学習者にとっては「単元の核となる社会的事象」から導かれる「具体的な単元の核の社会的事象」の設定によって、単元の導入から単元全体を通して学習内容を捉え易くし、社会認識を学習者の内面に形成しやすくする、というメリットがあると考えられる。北俊夫氏の考案した「知識の構造図(教材構造図)」における「中心概念(考えてわかること)」と、単元を通して理解させるべき内容を設定するというプロセスについて異論はない。しかし、「不変的な性格をもっている<sup>3</sup>」という点については見解を異にする。この過程に、その単元の中心概念を裏付ける先行研究等を加えることで、学術的根拠のある授業を実践していくという教員の資質・能力の向上に繋がる。教員養成においては、学術的根拠のある理論を調査・分析した上で受け入れ、それに裏付けられた教科授業を実践することを意識させることができると考える。

【図1】 「単元の核となる社会的事象」を設定した  
社会科単元構想



本稿では、教科専門としての歴史学・地理学研究と、教科教育・教職専門としての教材開発・教科授業研究、この両者を繋ぐものとしての教科開発学の視点から、論じていきたい。

## II 問題の所在

静岡県静岡市の公立小学校では、第4学年「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」の単元において、慣例的に「巴川改修工事の事例」を取り上げて学習している。この教材を筆者も実践したことがあるが、①特定の「人物」ではない、②「地域の人々の生活の向上」を学習者が理解することが難しい、③「地域」の範囲が巴川流域に限定されている、④「洪水が起こらないようにするために何としてでも改修工事を行いたい」という「願い」のベクトルが対立している、等の点で課題が残されている。

確かに、平成10年度改訂学習指導要領以前は、この単元では「開発」分野のみの具体的事例を通して、先人の働きを生活面ばかりではなく、技術や土地条件の面からも理解することとしていた。それは、昭和22年度学習指導要領社会科編(Ⅰ)(試案)の「私たちの祖先は、どのようにしていろいろな危険を防いだか」という防災の視点が根底にあり、そこから繋がる社会的事象として「開発」が対象とされ、改訂を経ても受け継がれてきた側面があるからである。当時としては、学習指導要領に準拠した教材であったと言える。地域教材の開発は容易ではなく、完成度の高さからも、この教材が慣例的に使用されてきたのは理解できる。しかし、平成10年度改訂学習指導要領では、「産業」分野が学習者にとってより身近であるという理由で追加設定され、「地域の防災」の視点から「地域の発展」の視点に移行した背景を考慮すべきであろう。詳細については後述する。

【表1】 本単元に関わる学習指導要領の記述の変遷

【昭和22年度学習指導要領社会科編(Ⅰ)(試案)】 問題二 私たちの祖先は、どのようにしていろいろな危険を防いだか。
【昭和30年度改訂学習指導要領】 (3) 人々のこうした努力によって、昔から郷土の姿は変わってきたが、またわたくしたちも、今後の郷土の発展について考えるために、生活の改善に努めた先人のくふうや他地域の開発の事例などを参考にすることがたいせつである。
【昭和33年度改訂学習指導要領】 目標(4) 郷土の生活を現在の状態にまで発展させてきた先人の苦心や、他地域の人々の暮らし方などに学びながら、郷土の発展に尽そうとする気持を養う。 内容(11) 自分たちの郷土を発展させることが、日本の発展の基礎になることを考え、先人の経験を生かして郷土の生活の改善のしかたなどについてくふうすることがたいせつである。
【昭和43年度改訂学習指導要領】 目標(2) 土地の開発、交通の発達などに努めてきた先人のはたらきやその時代的背景などについて理解させるとともに、地域社会の一員として、より広い視野からその発展を考えようとする態度を養う。 (4) 先人の行なった開発の仕事や現在進められてい

<p>る開発の様子を理解させ、開発に伴う関係者の苦心や人々の願いについて考えさせる。</p> <p>ア 土地の開拓や用水路の整備、山林の保護育成や堤防の建設など、自分たちの身近な地域について先人が行なった開発の具体的事例を調べ、当時の技術や世の中の様子などと結びつけて、その苦心を考えること。</p>
<p><b>【昭和52年度改訂学習指導要領】</b></p> <p>内容(2) (前略) 地域の開発に果たした先人の働きについて理解させる。</p> <p>イ 先人による地域の開発や保全の具体的事例を取り上げ、先人の働きを当時の人々の生活や用いた技術及び土地の条件の面から理解すること。</p>
<p><b>【平成元年度改訂学習指導要領】</b></p> <p>内容(4) 地域の文化や開発などに尽くした先人の具体的な事例を調べて、先人の働きや苦心を当時の人々の生活の様子や考え方、技術や道具などの面から理解できるようにするとともに、現在にあっても地域の人々の生活の向上と安定のためにいろいろな努力がなされていることに気付くようにする。</p>
<p><b>【平成10年度改訂学習指導要領】</b></p> <p>内容(5) (前略) 地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする。</p> <p>内容の取扱い(4) 内容の(5)のウの「具体的事例」については、地域の開発、教育、文化、産業などの発展に尽くした先人の中から選択して取り上げるものとする。</p>
<p><b>【平成19年度改訂(現行)学習指導要領】</b></p> <p>内容(5) (前略) 地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする。</p> <p>内容の取扱い(6) 内容の(5)のウの「具体的事例」については、開発、教育、文化、産業などの地域の発展に尽くした先人の中から選択して取り上げるものとする。</p>

※国立教育政策研究所学習指導要領データベースより作成<sup>4</sup>

また、現代の気候変動から受ける自然災害や将来への生活方法を学習者に考えさせる視点から、巴川改修工事の事例は防災の単元の教材とした方がよいと考える。巴川上流部の洪水の一部を分水し、巴川流域の浸水被害を軽減させる目的で、1999年に大谷川放水路が完成しており、これとの関連でこの事例をより生かせるのではないだろうか。

そこで、指導要領解説に準拠し、学習指導要領に示されている身に付けさせたい力(以下、付けるべき力)をより適切に“付けられる”教材が必要だと感じた。実際、本単元についてのみ『静岡市評価規準モデル(社会科)』<sup>5</sup>の設定が曖昧である。しかも、地域教材(静岡県や静岡市の事例を取り扱うべき)であるにもかかわらず、評価規準の記述内容が教科書(教育出版)で取り扱われている「神奈川県横浜市・吉田新田の事例(開発分野)」のものとなっている。地域教材を使用する単元のため、具体的事例を絞りにくいということに起因しているのであろうか。しかし、次単元については、同じ地域教材にもか

かわらず、筆者自身が教材開発した「静岡県駿東郡清水町の柿田川の事例」「静岡県周智郡森町の森山焼の事例」に基づく評価規準が設定されている。そうであるとする、本単元には適切な教材がないので「巴川改修工事の事例」を使用し続けてはいるが、静岡市としても推奨しているわけではないのではないかと。静岡市社会科副読本『しずおかだいすき』<sup>6</sup>でも、「静岡市の発展に尽くした人々」については見開きで2ページ、18名が紹介されているに過ぎない。しかも、そこに記載されている人物の業績を取り扱った事例での教材で、学習が展開されている例はほとんどない。

この状況は現在も続いているのであるが、実は筆者は、6年前に、この状況を改善しようと本単元で教材開発を行った。移行期ということもあって平成10年度改訂・平成19年度改訂の両指導要領解説の共通点を調べたところ、指導要領解説には「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」「地域の発展に対する先人の願いや工夫・努力、苦心、地域の人々の生活が向上したことなどを具体的に調べる」「地域や児童の実態を考慮し、児童が先人の働きと地域の人々の生活の向上とを関連付けて考える事例を選択」「人物の業績を中心に学習できるように配慮する」と示されていた。筆者は、本単元での教材開発の第一歩は人物探しだと考えた。そこで、約150年から10年前までの範囲で、現在の静岡市の発展と結びつくと考えられる人物、約2000人の中から、指導要領解説に準拠する人物は誰かを考え探した。そして、学習者にとってより身近なものと考え、プラスチックモデル(以下、プラモデル)産業を通して静岡市を発展させた、タミヤ模型株式会社創設者・田宮義雄を対象となる人物として教材開発を行い、単元構想を練り、授業実践をした。しかし、田宮のプラモデル開発を、「地域の発展に貢献し」たことや「地域の人々の生活が向上したこと」に関連付けて捉えさせることができなかつたこともあり、十分に彼の業績を理解させることができなかつた。田宮が勲五等瑞宝章(社会・公共のために功労がある者に授与される)を受賞していたり、その当時から現在も、静岡市はプラモデル産業を中心に「ホビーのまち」として打ち出している一面があつたりするにもかかわらず、である。本研究の根底には、その時の失敗による反省も活かされている。

そこで、本単元で学ぶことは何かを改めて考えた。社会科である以上、やはり学ぶべき対象は社会的事象である。それも、枝葉ではなく本単元の根幹になるものでなければならない。人物の業績を通して、大きな概念を知識(中心概念)として獲得するのである。社会的事象については、指導要領解説に、

(前略) 第4学年では「地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力」(中略) 各学年の指導において、児童の発達段階を考慮して、社会的事

象を公正に判断することができるように配慮することが大切である。社会的事象を多面的、総合的にとらえ公正に判断することを意味している。取り上げる内容や教材が一方的であったり一面的であったりすると、公正に判断する能力が十分に育成されにくくなる (中略) 児童が社会的事象を公正に判断することができるよう、教材の構成、事例の選択、教師の助言などを適切に行うことが大切である。<sup>7</sup> (下線—引用者)

と示されている。学習者が社会的事象について各学年での目標を実現するには、まず、教員が社会的事象に関わる教材の構成や事例の選択を適切に設定しなければならない。学術的に証明される、その単元の核となる社会的事象を見極め、適切に具現化した教材が必要である。したがって、学習指導要領に準拠し、学術的根拠に基づく、単元の核となる社会的事象 (以下、単元の核となる社会的事象) を設定し授業実践を行うことで、付けるべき力を付けられることを検証するため、本研究テーマを設定し、実際に教材開発を行った。

### Ⅲ 学習指導要領での本単元で付けるべき力の把握

平成19年度改訂学習指導要領の改訂に当たっては、付けるべき力を明らかにしてから具体的な内容を設定するという方法が、今まで以上に強く打ち出されている。本単元に特化することではないが、指導要領解説の目標と内容、内容の取扱いから、付けるべき力を把握する必要がある。第3学年及び第4学年の目標(2)、

地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。<sup>8</sup>

により、付けるべき力は、①地域の発展に尽くした先人の働きや苦心を理解すること、②自分たちの住んでいる地域社会に対する誇りと愛情をもつ (現在及び過去の地域の人々の工夫や努力によって生み出された、地域社会の特色やよさへの理解に基づく) こととされている。また、本単元での学習には地域に関する資料の使用が必要であることが分かる。続けて、同目標(3)には、

地域における社会的事象を観察、調査するとともに、地図や各種の具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする。<sup>9</sup>

とあり、付けるべき力は、③願いを実現していく地域の人々の工夫や努力、協力と生活や生活環境の維持と向上との関連、地域の人々の生活や産業と国内の他地域や外国との結び付きなどについても考える力をもつこと、④具体的資料を効果的に活用することとされている。また、この記述により、地域に関する資料の使用に留まらず、地域教材の開発が必須であることが分かる。なぜなら、

教科書に日本の各地域 (本稿では静岡市) の具体的事例が全て記載されているわけではないからである。

次に、これらの付けるべき力を達成するために授業で行うべきこととして、内容や内容の取扱いがある。同内容(5)、

地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする。<sup>10</sup>

にある「地域の人々の生活」とは、自分たちの祖先や地域の発展に尽くした先人の働きの上に成り立っている地域の人々の生活の様子を指しており、その歴史的背景に目を向け、「地域の人々の生活」の移り変わりについて学習し、それらの先人の働きや苦心が地域の人々の生活の向上に大きな影響を及ぼしたことを具体的に考えることができるようにすることとされている。この学習活動が、先人の生き方に触れ、地域社会に対する誇りと愛情をもつことに繋がるということである。

また、地域の発展に貢献した人々が、強い信念をもって情熱を傾け、よりよい生活を求めて努力したことや、これらの先人の働きや苦心によって地域の人々の生活が向上したことなどを取り上げる点については、

内容の(5)のウの「具体的事例」については、開発、教育、文化、産業などの地域の発展に尽くした先人の中から選択して取り上げるものとする。<sup>11</sup>

として、同内容の取扱い(6)で言及されている。地域の発展や技術の開発に尽くした先人の具体的事例の中から一つを選択して取り上げることが決められており、特にその人物の業績を中心に学習できるよう配慮する必要があるとされている。

最後に、他の単元とも関わる、同内容(1)のア、

身近な地域や市 (区、町、村) の特色ある地形、土地利用の様子、主な公共施設などの場所と働き、交通の様子、古くから残る建造物など<sup>12</sup>

にあるように、特色ある交通の様子と結びつけて身近な地域の土地利用の様子が社会的な条件とかかわりがあることに気付かせる必要もある。つまり、本単元では地域の発展に尽くした人物の具体的事例について調べる学習を行うが、あくまでもそれらを通して地域の発展がどのように行われたかを学ぶことが中心であり、一人物の伝記の学習になってはならない、ということである。

以上の付けるべき力を項目別に分けると、【表2】のようになる。本単元ではこれらの力が付くように教材を開発し、単元構想を練り、資料を作成し、授業実践を行うことになる。

【表2】 本単元での「付けるべき力」の把握

理解	地域の発展に尽くした先人の働きについての理解
----	------------------------

態 度	現在及び過去の地域の人々の工夫や努力によって生み出され、地域社会の特色やよさへの理解に基づいての、自分たちの住んでいる地域社会に対する誇りと愛情
能 力	(児童の発達の段階や学習経験に応じて、系統的、段階的に) 地域における社会的事象を観察、調査するとともに、地図や各種の具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力、調べたことや考えたことを表現する力
資 料	①資料から必要な情報を読み取る力 ②資料に表されている事柄の全体的な傾向を捉える力 ③必要な資料を収集する力
地図(帳)	問題解決のための教材として効果的に活用する知識や能力

#### IV 対象地域の設定と4分野の選択

##### (1) 静岡「市」を対象地域に設定

本単元で付けるべき力を把握した上で、指導要領解説から地域の対象範囲を把握し、設定する。このことは、学習指導要領を踏まえた、本単元における本教材の位置付けを明らかにすることにも繋がる。

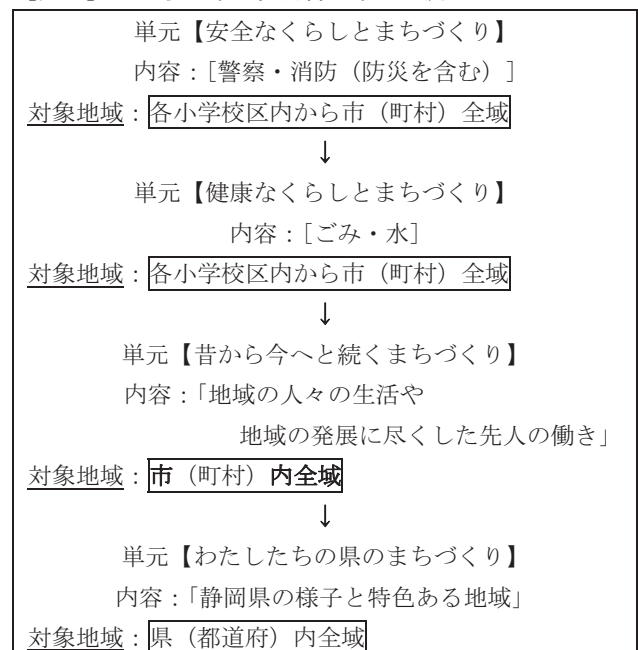
学習指導要領に示されている、学習者に理解させるべき内容の系統性・段階性が、その教材に各学年の単元の細部にまで本当に適用されているかという点は、都道府県を問わず、小中学校のどの学年にも共通する課題であろう。本単元では「身近な地域」の設定がそれに該当するが、単元によって「身近さ」は対象範囲が異なる。

第4学年では、「警察・消防(防災を含む)」「ごみ・水」を扱い、学習者自身の家、学区内を学習のスタートとするとはいえ、実際は市全体を対象とする一般化された社会的事象として捉えている。

学習者の、身近な地域の範囲の広がりに対する思考段階と、年間学習指導計画の段階(単元の繋がり)を踏まえると、**図2**<sup>13</sup>のような流れが考えられる。「学区内」→「学区内と市内」→「市内」→「県内」という学習段階で、本単元での身近な地域は「市内」に位置付けられる。もし、本単元で市内全域を扱う内容の教材を使用しないで、学区周辺か市内の限定された一部の地域のみを扱う教材を使用した場合、次の県内全域を扱う単元へ一段抜かしで移行してしまうことになる。これは、子どもの思考段階を考慮すると非常に負担を強いることになる。それに対して、本単元の段階で関わる地域を広げ、市内全域を取り扱うことができる学習ができれば、次単元へのステップは小さくなり、学習者の思考の負担を軽減することができる。「平成の大合併」以降、「新しく静

岡市になった市町」在住の学習者についても、小学3年生で学区内や「元の市町」内の生産や販売についての学習を通して、それらの地域の産業や文化等の社会的事象のよさを学んでいる。本単元の段階で「静岡市」と一括りにしたからといって、それらの地域を蔑ろにすることにはならないであろう。また、市内全域を対象とするということは、静岡市内の小学校であればどここの小学校でも共通して取り扱うことができるということである。本単元の次の学習「わたしたちの(静岡)県のまちづくり」で静岡県全域を扱うことから考えると、本単元での教材としては静岡市全域を扱うことが望ましい。つまり、本単元での身近な「地域」は、静岡「市」を設定するべきであると考えられる。

【図2】 小学4年生社会科の単元の流れ



本単元の次単元は、県内全域を大まかに捉えた後、「自然環境、伝統や文化などの地域の資源を保護・活用している地域やそこに見られる人々の生活の特色を具体的に調べる<sup>14</sup>」学習(単元)に入る。そこでは、例えば**図3**<sup>15</sup>のように学習が展開される。

学習指導要領内容(5)の解説にも「(前略)適切な事例が身近な地域や市に見られない場合には、県(都、道、府)内から選定することも考えられる<sup>16</sup>」と記述されている。本単元では、前述したように、学区どころか、なるべく県内の事例に近付けるために市内全域を扱う(葵・駿河・清水の3区を繋ぐ)教材が必須であると考えられる。

以上述べたことから、本単元の教材は、静岡市内の小学校であればどここの小学校でも共通して取り扱える内容である必要があると考えた。学習(単元)終了時には、「わたしたちが住んでいる静岡市は、この人物の、このような働きや苦心を通して、このようなまちづくりがなされ

【図3】 本単元と次単元との比較・関連・統合

	次単元 静岡県西部	本単元 静岡県中部	次単元 静岡県東部
地域	静岡県周智郡 森町	静岡市全域 葵・駿河・清水の3区	静岡県駿東郡 清水町
地域の資源の 区分	地域の伝統や文化の資源を保護・活用している地域	◎静岡茶を通して現在の静岡市のまちが作られ、静岡茶を通して静岡市の現在と未来の発展を考える	地域の自然環境の資源を保護・活用している地域
保護する資源	森山焼, 祭り, 寺社, 歴史的な建物や地形	◎特産品, 市内外との交流の手段としての静岡茶	柿田川
活用方法	森山焼, 祭り, 寺社, 歴史的な建物や地形を生かしたイベント, 伝統工芸を体験できる施設 ◎まちおこし		◎柿田川の水を使った特産品作り ◎柿田川公園
特色	観光という側面	観光という側面	観光という側面
静岡県の特色	↓ ↓ ↓ 観光（場所・特産品・イベント）の県という側面		

た（なされている、これからもなされていく）」と学習者が理解できるように指導するべきであろう。

(2) 学習者にとって身近な「産業」分野を選択

対象地域を設定することができたら、次は、内容の取扱い(6)にある、4つの分野（面）のうち、どれを選択するかである。

内容の(5)のウの「具体的事例」については、開発、教育、文化、産業（中略）の中から選択して取り上げるものとする。<sup>17</sup>

注目すべき点は、平成10年度改訂学習指導要領の本単元にかかわる箇所、そこに「産業」が加わったことにある。このことに対して、文部省初等中等教育局教科調査官であった北俊夫氏は、「教育・文化は、取り上げ方や子どもの実態から教材化することは難しく、（これまでは一引用者）各地域とも「地域の開発」の教材化に終始していた感がある。（中略）産業の発展に尽くした先人の教材化が注目されることになる。その理由として、一つは学習内容的な側面からである。つまり、自分たちの住む身近な地域に教材化に適した先人や事例がなかった場合、従来は行政地域の中の事例を（必ずしも適切とは思わないで）選んでいたところを、これからは「産業」の事例を取り上げることによって、距離的な身近さではなく、心理的身近さでせまることが可能になった<sup>18</sup>」という背景があったと述べている。産業分野は、4分野の中では最後に追加されたもので、他の3分野と比べ、学習者にとってより身近で理解しやすく、具体的事例として適合しやすいものであると学習指導要領においても認識されていると考えられる。

続いて、学習者の実態をアンケート（レディネス）調査「あなたが思っている、静岡市の有名なものや有名なことの第1位から第3位までを書いてください<sup>19</sup>」の結果から見てみると、静岡茶またはお茶を書いた学習者が134名中114名（全体の約85%）であった。しかも、その内、静岡茶またはお茶を第1位に挙げた学習者は82名（全体の約61%）もいた。心理的にも静岡茶は学習者にとって身近な教材であると言える。実際、静岡茶の産地は「安倍奥（井川・梅ヶ島）」「安倍川流域（美和・賤機・玉川・大河内）」「藁科川流域（南藁科・中藁科・清沢・大川）」「丸子」「平山」「両河内」「庵原」「小島」「日本平山麓」と、まさに静岡市内全域にわたっている。加えて、2009年に静岡市は「静岡市めざせ茶どころ日本一条例」を制定した。さらに、2015年8月に開催された「第69回全国茶品評会・普通煎茶4kgの部」において、静岡市は、全国最優秀産地に贈られる「産地賞」を受賞している（2年連続で受賞）。生産・販売・使用・静岡市の政策と、茶産業は静岡市全域に関わっている。また、「中学年に当たる内容では、地域と言えは身近な地域、結節地域、等質地域という意味合いが強い<sup>20</sup>」という意図があったが、学習指導要領でもその意図が継続されていると考える。これを本単元の事例に当てはめるとすると、静岡市は学習者にとって静岡茶の等質地域であり、生活圏の共有としての結節（機能）地域であるという位置付けが的確であろう。改めて、「身近な地域」を静岡「市」に設定する妥当性が検証されたと考えられる。以上から、物理的にも心理的にも、静岡茶は有名で身近なものであるという認識が、静岡市内の小学校では共有され得ると考える。

現在、静岡市内の小学校で使用されている教科書<sup>21</sup>では、

土地改修（埋め立て）による神奈川県横浜市の発展を扱った開発を事例に挙げている。確かに、吉田新田（横浜駅やJR 関内駅、横浜スタジアムより北部の地域）の土地改修（江戸時代前期）という土台が横浜市今の発展に繋がっていることは明白であるが、巴川の改修工事によって静岡市全体の今の発展があるとは考えにくい。横浜市と静岡市のこの違いは歴然としていて、とうてい同等に取り扱える内容ではない。静岡市は江戸時代までに駿府のまち（都市）として成立していた。横浜市のように幕末期の開港場として急速に都市化したわけではないため（清水港周辺に限定すれば、横浜港を模範としていたため類似点はある）、開発分野を主軸とした適切な事例とすることは難しい。

よって、本単元では産業分野（静岡茶産業）を選択することにした。

## V 単元の核となる社会的事象の設定

### (1) 単元の核の見極め

本単元以前の小学4年生の教科書の大単元名は、各々「安全なくらしとまちづくり」「健康なくらしとまちづくり」であり、単元の核を「安全なまちづくりの仕組み」「健康なまちづくりの仕組み」と見極めた。本単元の教科書での単元名は「昔から今へと続くまちづくり」<sup>22</sup>である。そこで、筆者は「まちがつくられていく様子」が単元の核になり得ると見極めた。

### (2) 単元の核となる社会的事象の設定

地域教材開発においての最重要課題は、学術的根拠に基づく、単元の核となる社会的事象を設定することであると考えられる。ここでいう「学術的根拠に基づく」とは、単元の核と見極めた「まちがつくられていく様子」から本単元の核となる社会的事象を「都市の形成」であることに伸展化し、静岡市の画期的な都市の形成が日本の近代初期から近代後期であったことを踏まえ、近代都市の形成史の学術研究に目を向けることである。具体的には、先行研究を調べ、近代都市がどのように形成されていったのか、その過程（経緯）や構造（仕組み）について理解することである。都市の形成は多様であるが、前述したように、学習指導要領に示されている「開発・文化・教育・産業」の4分野のうち、産業による都市の形成（近代都市化）理論の視点から行うこととした。

産業による都市の形成については、都市形成にかかわる先行研究によれば図4-1<sup>23</sup>のような過程を経ることとなり、学術的にはインフラ整備の過程が都市の形成に重要な意味をもつこととなる。

【図4-1】 近代都市の形成過程。

◎ 産業革命または産業の構築

- ⇒ 運輸面で鉄道を主軸とする交通網の発達  
(インフラ整備)
- ⇒ 市街地の発達
- ⇒ 経済成長
- ⇒ 都市の形成 (近代都市化)

これは、静岡市茶町の形成や静岡市のインフラ整備にかかわる先行研究や史実、図4-2<sup>24</sup>のような静岡市の都市形成過程に当てはめることができ、静岡市の近代都市化の要因は茶産業の近代化、及び静岡茶を清水港からアメリカへ直輸出したことにあつたことが明らかである。

【図4-2】 静岡市の近代都市化の過程

- ◎ 静岡茶の清水港直輸出・再製茶工場設立
  - ⇒ 静岡市における静岡茶（製茶）品質の向上  
生産量の増加
  - ⇒ 再製茶工場設立
  - ⇒ 静岡鉄道（軽便鉄道）開通
  - ⇒ 商社や業者数、建物等の増加
  - ⇒ 静岡市（まち）の近代都市化

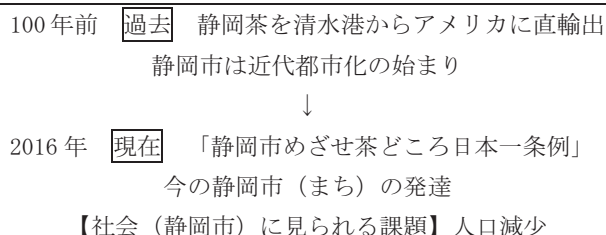
また、このことは、学習指導要領内容(1)のアの解説にも準拠しているといえる。

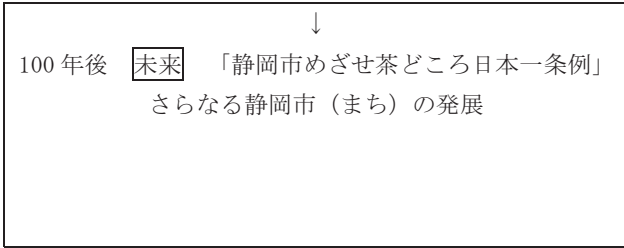
主な道路と市内の工場の分布、主な駅と商店の分布など、土地利用の様子を交通の様子と関連付けて考え、相互のかかわりに気付くようにする（後略）<sup>25</sup>

ここで筆者は、まちづくり（都市の形成）というものは、学習者にとって現在をその終点として捉えるよりも、常に移行期の一部と認識するべきではないかと考えた。

静岡市は、2006（平成18）年5月13日に（清水港から初めて静岡茶を直輸出した日からちょうど100年目にあたる）、100年前（過去・1906年）のこの出来事を契機に、「静岡市お茶まちづくり宣言」を出し、2009（平成21）年には「静岡市めざせ茶どころ日本一条例<sup>26</sup>」（現在）を制定している。そして、静岡市は、文化を内包した産業として静岡茶は静岡市のまちづくりの主軸であると捉え、100年後（未来）の静岡市のさらなる発展を計画し推進している。市の政策にも沿うものとして、図4-2の「静岡市（まちの）近代都市化」に続く項目として「静岡市（まちの）発展」として位置付けることができると考えられる（図5参照）。

【図5】 静岡市の近代都市化と発展目標





さらに筆者は、学術的な根拠との関わりを検証することと並行して、「現在の静岡市のまちはどうなのか」と社会（静岡市）に見られる課題を明瞭に把握することを行った。ここでは、静岡市の人口減少と静岡茶の低迷を挙げた。

現在、静岡市は人口が減少傾向で、2015年の国勢調査で、静岡市の人口は約70万5千人と、20政令市中で最少であった。人口増減率も1.5%減と、政令市ではワースト1位の減少幅で、減少数では全国市町村別でワースト10位であった。静岡市の人口は10年の前回調査に比べ1万959人（1.5%）減った<sup>27</sup>。どうしたら、静岡市の人口減少に歯止めをかけ、人口増加に反転できるのか。静岡市の人口減少は1991（平成3）年から始まっている。この課題解決に向けての対策として、「静岡市の移住・定住情報サイト『いいねえ。静岡生活』」「静岡市結婚支援事業『しずおかエンジェルプロジェクト』」「県外大学等への通学サポート（新幹線費用の貸与）」「地元企業への就職活動をサポート」「しずおか女子きらっ☆プロジェクト」<sup>28</sup>等が立ち上げられている。

これらの対策の一つに「静岡市めざせ茶どころ日本一条例」もあるのだと考えられる。一見、条例というものは9、10歳の学習者には理解が難しいと思われるかもしれない。しかし、前述したように、静岡茶は学習者にとって日常生活面・知識面共に身近なものである。しかも、「単なる飲み物」であった静岡茶が、静岡市の近代都市化の要因の一つであったり、市の100年を背負っている物の一つであったりすることを知った学習者は、驚きや興味、関心をもって前掲の他の対策よりも自分事として捉えるようになるだろう。現在、静岡市静岡茶の生産・輸出については往時の隆盛が見られない。静岡市（地域社会）に対する誇りと愛情を培われ学習者は、先人の働きと苦心でつくられた静岡市の人口が減少していることと、鎌倉時代から続く静岡市の茶の生産や独自の茶文化の勢いが低迷していること、この二つが静岡市も抱える課題として把握できるであろう。そして、この両者を繋ぐ対策であるこの条例に対して、学習者は、小学生の立場、中学生としての立場、或いはそれ以上の立場、即ち彼らの成長過程において、自分自身ができることをこの先も継続して考え続けることができるであろう。静岡茶が学習者にとって有名で（誇らしいもので）身近なもの（愛着のあるもの）であることもその要因の一つである。

澤井陽介氏（文部科学省初等中等教育局視学官）は、次期学習指導要領での「社会に見られる課題を把握して社会の発展を考える学習の充実」において、社会に見られる課題を把握して、社会的事象に関心をもち続けてもらいたいという願いがある<sup>29</sup>、と述べている。前述したように、この点においても本教材はカバーしている。

以上、単元の核「まちがつくられていく様子」について、学術的根拠（先行研究）があることを検証し、且つ、社会（静岡市）に見られる課題を加えて、単元の核となる社会的事象を「静岡市の近代都市の形成」と設定した。

### （3）具体的な単元の核となる社会的事象の設定

単元の核となる社会的事象が設定できたら、「静岡市の近代都市の形成」を学習者に理解しやすくするために、具体的な文言に変換する必要がある。それが、具体的な単元の核となる社会的事象である。これは、単元の核となる社会的事象の設定において、先行研究に基づいて検証する過程で既に明らかになっている（図6参照）。

【図6】静岡市の近代都市化の具体的な過程

- ◎ 静岡市の画期的な都市形成は、明治中後期～大正初期。近代都市化の学術的根拠は、産業による港湾から商品の輸出過程でのインフラ整備に端を発する。
- ⇒ 静岡茶の品質の向上・生産量の増加
- ⇒ 清水港の開港場指定
- ⇒ 安西・茶町・北番町一帯に「茶町」形成
- ⇒ 再製茶工場設立
- ⇒ 茶直輸出船「神奈川丸」契約・清水港入港
- ⇒ 静岡茶をアメリカへ直輸出開始
- ⇒ 静岡鉄道（軽便鉄道）開通（茶町～清水港間）
- ⇒ 商社や業者数、建物等の増加
- ⇒ 清水港の茶の輸出量日本一
- ⇒ 静岡市（まち）の近代都市化

加えて、学習指導要領内容(5)「人々の生活の変化や人々の願い、地域（静岡市）の人々の生活の向上<sup>30</sup>」について、それが視覚的に理解しやすい具体的事例である必要がある。産業分野での難点は、企業家の「利潤の追求」の要素が多く含まれると、「人々の生活の向上に尽くした」ことを学習者が理解しにくくなることである。①過去から現在への過程で変化が分かりやすい社会的事象であること、②視覚的（写真や絵、図、グラフなど）に分かりやすい社会的事象であること、以上の二つは、単元目標の達成において除外してはならないポイントである。本事例ではこれらの要件も満たしている。それで、具体的な単元の核となる社会的事象を「静岡茶を清水港からアメリカへ直輸出したことを通して、静岡市が近代都市化したこと」と設定した。



## VI 「先人」の設定

### (1) 「人物」の業績を中心にすえた学習

学習指導要領内容の取扱い(6)に、「その人物（下線一引用書）の業績を中心に学習できるよう配慮する必要がある<sup>31</sup>」と記述されている。国語辞典<sup>32</sup>で、「人物」は以下のように記述されている。

- 1 ひと。人間。人類。
- 2 人柄。人品。ひととなり。風采。
- 3 人格・才能などのすぐれた人。役に立つ人。人材。
- 4 描画の対象である人間の姿・形。

人物というからには、具体的な個人であり、かつ人格や能力が分かるものであり、さらに具体的な姿や形が見られるものであるべきである。本単元の教材の人物としては、具体的に個人を特定できる名前（本名ではなく、言い伝えの名前や通称でもよい）やプロフィール（経歴）、写真（または肖像画や像）のあるものが必要不可欠ではないか。単なる「人」ではなく、「人」の中でも特定の個人を指す「人物」であると押さえておきたい。

### (2) 対象人物を設定する

静岡市の近代都市化を推進した社会的事象とは、**図5**からも分かるように、清水港からの静岡茶の直輸出である。そこで、「静岡茶を清水港からアメリカへ直輸出すること」を推進した人物を調査し、「海野孝三郎（うんのこうごぶろう）」を対象人物に絞った。海野が対象人物に相応しいことは、単元の核となる社会的事象の設定において、先行研究に基づいて検証する過程でほぼ明らかになっている。そして、海野についての先行研究<sup>33</sup>を踏まえて、その業績を検討した結果、彼が清水港からの茶直輸出に取り組む過程とその延長線上で、静岡市が近代都市化したことが分かった。

以下に、海野が学習指導要領に準拠した学習が可能な人物かどうかを、学習指導要領内容(5)が分析する観点と彼の業績の具体的事例と照らし合わせて検討する。

地域の人々の生活について、次のことを ア見学、調査したり イ年表にまとめたりして調べ、 ウ人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の エ働きや苦心を考えるようにする。<sup>34</sup>（下線一引用者）

#### ① アについて

海野や茶、茶直輸出について調べるための、茶畑や製茶工場、茶販売店、茶に関係する石碑・史跡・観光所（地）、清水港、静岡鉄道（駅を含む）などが、静岡市内各所に多数ある。海野孝三郎に関する石碑（頌功碑）もあり、写真（本人上半身と茶直輸出船神奈川丸）とともに清水港に建立されている。見学・調査は可能である。

#### ② イについて

伝記や雑誌などの資料やその他の史料から、何年に何

が起きたのかが明確になっている。また、本人の項目に加え、同時期に日本社会や世界では何が起きていたのかについても、日本近世末期以降の歴史なので資料（史料）も多く、容易に調べることができる。筆者も先行研究を基にして、授業資料用伝記『海野孝三郎物語—初めて静岡市清水港からお茶を世界へ売った人—』を執筆した。それらから、年表を作成することは可能である。

#### ③ ウについて

海野が感動し目標とした横浜港の様子と当時の清水港との比較（写真資料）、そこから清水港の繁栄・発展（写真）、それへの清水港の人々の思いや願い（文献資料）を読み取ることができる。また、静岡茶直輸出の過程で、静岡鉄道が建設され、発達し（写真・文献資料・インターネット資料）、静岡市街や安西（茶町）周辺の発展していく様子（写真・文献資料・インターネット資料）に気付くことができる。

#### ④ エについて

海野の出自は駿河国井川村（静岡市）で代々将軍家御用茶を管理してきた家柄。目覚ましい発展を遂げている横浜港を見て、清水港も直輸出を通して横浜港と同じ程度にまで発展することを願い、夢見る。度重なる県会議員選挙の落選や会社の倒産、9年間提出し続けた清水港開港場請願書、アメリカでの静岡茶販売シェア拡大のための自費による複数回の渡米、直輸出船の利用を巡っての日本郵船株式会社との粘り強いやり取りと契約成功、粗悪茶の悪名払拭のための静岡茶品質向上の推進、静岡茶や静岡市に対する熱意や貢献（功績）等の働きや苦心、努力がある。

### (3) 巴川の改修工事の事例との比較

**【表3】**から、本稿での主張に沿ったプロセスで作成した教材は学習指導要領に準拠していることに対して、巴川の改修工事の事例では十分な対応ができていないことが分かる。

また、教科教育の視点から学習者の発達段階を考慮するならば、社会科の学習は、できれば前向きに明るい気持ちで取り組めることも大切ではないだろうか。①生前から認められていた、②本人が実際に行った、という人物であると、学習者が共感し、共に人生を歩んでいるような気持ちになり得る点で望ましいと考える。巴川改修工事で、特定の人物が定まらないほどの多くの人達が関わったことや、その苦労や努力を知ることが、それはそれで学習者にとって十分な学びになり得る。しかし、学習指導要領に準拠しているのは海野孝三郎であり、海野も決して一人でやり遂げたわけではなく、そこには別の名のある人物やその他大勢の人達の協力があつた。このことを学習することの価値は、巴川改修工事の事例と同様か、それ以上にある。

**【表3】 静岡茶直輸出と巴川改修工事, 2つの教材の比較**

教材	静岡茶を清水港から直輸出することを通して、静岡市の近代都市化に尽くした人物（海野孝三郎）	巴川の改修事業に尽くした人々
①地域	静岡市全域	巴川流域
②人物の特定	あり「海野孝三郎」	なし
③人物の業績	生前からの評価あり 業績を記した石碑あり	なし
④人物の写真等	上半身で個人がはっきりとわかる写真 全身が写っている他の人物との集合写真	なし
⑤地域の人々の生活の向上や発展	生活の向上や発展あり (静岡市の近代都市化と静岡茶を中心としたまちづくり)	生活の維持・向上あり (維持を中心)
⑥人物(先人)の願い	静岡茶の品質を向上させ、清水港から直輸出することで、同港を横浜港のような活気のある港にしたい	巴川の流れをよくして洪水が起こらないように、何としてでも改修工事を行いたい人達と、そうでない人達がいる
⑦身近さ	静岡茶(お茶)という返答が期待できる	巴川という返答は期待できない
⑧分野	産業	開発
⑨教材のもつ明るさ	単元を通して、当時の人々が全体的に同一意識で明るい未来に向かっていく背景から、働きや苦心を明るい気持ちで学ぶことができる。また、小学4年生なりに理解できる具体的な範疇で、これからもさらに身近な地域へ貢献・努力しようとする気持ちをもつことができる。	単元を通して、当時の人々に賛成と反対の立場があることから暗い背景があり、苦心を暗い気持ちで学ぶことになる。また、施設の管理は行政によるため、小学4年生なりに理解できる具体的な範疇ではなく、これからもさらに身近な地域へ貢献・努力しようとする気持ちをもつことが難しい。

以上のような検証を行い、対象人物(先人)を「海野孝三郎」に設定した。結果論だが、海野孝三郎は静岡市社会科副読本『しずおかだいすき』に掲載されている人物であった。但し、同副読本には彼の頌功碑の写真と短い業績文が掲載されているのみで<sup>35</sup>、最初から対象人物を探している段階では注目することはできなかった。

また、民間色が強いと、「利潤を追求した」とことと地域の人々の「生活の向上に尽くした」ことの違いを学習者が理解しづらい。これは本単元で学習指導要領に示された「付けるべき力」を付ける上で重要なポイントになる。開発・教育・文化・産業の4分野のいずれにしても、海野孝三郎の事例のように、公共性が高い方が学習者の理解度が高くなると考える。

**VII 単元の目標の設定**

単元の目標とは、付けるべき力を具体化したものである。単元構想や授業展開は当該学習者に合わせて弾力的に作成するものであるため、本稿で行ってきた教材開発の試みは、単元の目標(評価規準は目標と相応している)までを述べることでひと区切りとしたい。本単元では単元目標を以下に設定した。

<p>《社会的な事象への関心・意欲・態度》</p> <p>清水港からの茶直輸出に力を注いだ海野孝三郎の、茶産業向上(茶)にかけた願いや働き、苦心に関心をもち、身近な地域の産業を向上させ、静岡市の発展に寄与した人物がいたことを調べ、静岡市に対する誇りや愛情を深める。</p>
<p>《社会的な思考・判断・表現》</p> <p>海野孝三郎の茶産業向上のための願いや働き、苦心(清水港開港場指定・茶直輸出・再製工場設立・茶の海外販</p>

路拡大など)が静岡市の産業の向上や交通の発達に大きな影響を及ぼすことを通して、産業と地域の発展をかかわらせて考えることができる。

《観察・資料活用の技能》

海野孝三郎の茶産業向上のための願いや働き、苦心(清水港開港場指定・茶直輸出・再製工場設立・茶の海外販路拡大など)とその結果や影響について、各種の資料を活用しながら年表にまとめている。

《社会事象についての知識・理解》

海野孝三郎の清水港開港場指定・直輸出・再製工場設立などの業績を調べることを通して、静岡市内に静岡県及び日本を支える産業の一つである茶産業向上推進の過程で静岡市を近代都市として発展させた人物がいたことを知り、その業績や願いが現在の静岡市のまちづくりに繋がっていることを理解することができる。

**VIII おわりに**

指導要領解説に「先人」「人物の業績」等と記述されているからといって、指導要領解説を読み込み、対象「人物」探しを行うと、「付けるべき力を付ける」という視点で、相応しい人物が見つからない。しかも、時間がかかる上に、どうしても「人物の業績」と「地域の発展に貢献」「地域の人々の生活が向上したこと」に結びつかず、こじつけになってしまい、下手をすると道徳教育にもなりかねない。

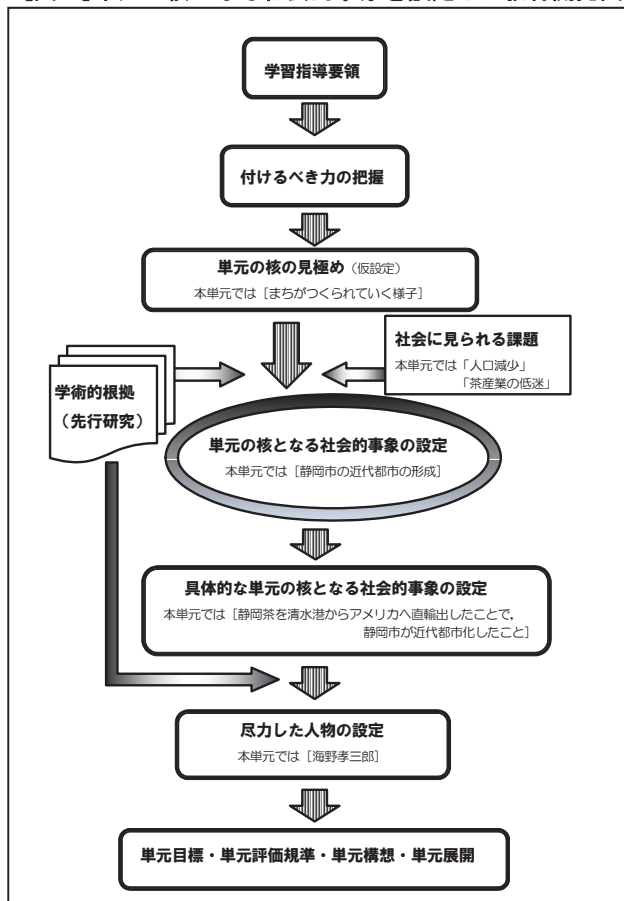
本稿で述べてきた、単元の核となる社会的事象を設定するという方法は、これとは正反対である。この方法で、開発した教材は、海野孝三郎が静岡茶の直輸出を通して静岡市を近代都市化した、という社会的(歴史的)事象にとどまらず、静岡市の現在・未来の社会的事象にも関心をもち続けていくことができるものであると考える。

本単元の学習は歴史・地理・公民分野をバランスよく

含む内容をもつため、小学校第3・4学年から中学校の学習にも直結する連結部位的な位置付けにある。また、本研究による「学術的根拠に基づいた、単元の核となる社会的事象を設定した教材研究からの単元構想(展開)」というプロセスは、小・中学校社会科各単元・各分野で通用すると考えている。本単元の教材開発方法・教材研究方法を中心に、単元構想・評価方法・資料作成について再考・活用されることを願う。素材が、単元の核となる社会的事象を設定することができた時に、学習者に「付けるべき力」が「付けられる教材」に変わる。

なお、本稿では、教材開発(単元の目標及び評価規準)までの記述にとどまった。授業実践における、本教材の具体的な単元(授業)展開案(ジグソー法を取り入れた、主体的・対話的で深い学びの実現を意図した)、独自で考案した資料活用法である「資料の変換」、学習を意図して独自で執筆した先人の読本(伝記)、授業で学習したことの定着度が評価できるテスト問題等については、紙面の関係で割愛し別稿に譲る。

[図7]単元の核となる社会的事象を設定した教材開発図



1 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』4版(東洋館出版社 2011年8月)  
 2 国立教育政策研究所教育課程研究センター『評価基準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料』(http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/shou/02\_sho\_shakai.pdf?time=1479540907611 2011年11月)

3 北俊夫『社会科「知識の構造図」』(小学校社会科教授用資料 東京書籍 2014年1月 p.4)  
 4 国立教育政策研究所学習指導要領データベース <https://www.nier.go.jp/guideline/>  
 5 静岡市立小・中学校評価研究委員会(静岡市校長会)『静岡市評価規準モデル社会科』(2011年4月)  
 6 静岡市教育委員会『静岡市小学校社会科副読本「しずおかだいすき」』第六版(2016年4月)  
 7 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』4版(東洋館出版社 2011年8月 p.105, p.106)  
 8 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』4版(東洋館出版社 2011年8月 p.19)  
 9 同上 p.20  
 10 同上 p.39  
 11 同上 p.42  
 12 同上 p.22  
 13 学習指導要領成と『小学社会3・4下』(教育出版株式会社 2014年4月文部科学省検定済)の記述内容をもとに作成。  
 14 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』4版(東洋館出版社 2011年8月 p.45)  
 15 学習指導要領の記述内容、前掲『静岡市評価規準モデル(社会科)』で扱われている教材(筆者作成)、本稿で主張している本単元の教材から作成。  
 16 同上 p.39  
 17 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』4版(東洋館出版社 2011年8月 p.42)  
 18 北俊夫『新しい教育課程と学習活動の実践 社会一小学校 新学習指導要領実践一』(東洋館出版社 1999年7月 p.104, p.105)  
 19 2015年9月に、静岡市立東豊田小学校4年生134名に対して実施したアンケート(レディネス)から引用。以前にも同様のアンケートを静岡市内の公立小学校4年生に実施したことがあり、類似した結果が得られた。  
 20 北俊夫『新しい教育課程と学習活動の実践 社会一小学校 新学習指導要領実践一』(東洋館出版社 1999年7月 p.105)  
 21 『小学社会3・4下』(教育出版株式会社 2014年4月文部科学省検定済)  
 22 同上 p.84  
 23 鈴木勇一郎『近代日本の大都市形成』(近代史研究叢書7 岩田書院 2004年5月)、戸所隆「近代化による都市的土地利用の変化と地域政策」(高崎経済大学地域政策学会『地域政策研究』第1巻第3号1999年3月)、江沛「華北における近代交通システムの初歩的形成と都市化の進展」(『現代中国研究』第18号)、和田瑞男「近代都市の条件」(横浜市、横浜市政策局政策課編『調査季報:横浜の政策力(5)』横浜市政策局 1964年11月)、中岡深雪「上海における都市の形成」(『経済学雑誌』第111巻 第3号 大阪市立大学大学院経済学研究科紀要 2010年12月)、中村彰夫「都市経済と港湾の役割」(『第一経大論集』第11巻 第3号 第一経済大学経済研究会 1981年12月31日)等をもとに作成。なお、近代都市とは、道路が舗装されており、上下水道が整っており衛生的であり、街路が整い、家並みも揃い、公園も整備されている等といった都市とされているが、この点については本稿との

関係が薄いため、詳細な記述については省いた。

<sup>24</sup> 『お茶王国しずおかの誕生 しずおかの文化新書6』財団法人静岡県文化財団 2012年1月), 二村悟・後藤治「茶産業の発展と静岡市北番町の町並み」(『日本建築学会計画系論文集』第570号 2003年8月), 『お茶のまち静岡市』(7刷 静岡市農業政策課 2015年6月), 静岡市ホームページ(日本茶輸出の歴史に学ぶ～清水港茶輸出開始から100年～

[http://www.city.shizuoka.jp/000\\_004229.html](http://www.city.shizuoka.jp/000_004229.html))等をもとに作成。

<sup>25</sup> 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』4版(東洋館出版社 2011年8月 p.23)

<sup>26</sup> 静岡市経済局農林水産部農業振興課『静岡市茶どころ日本一計画』(静岡市 2010年3月)

<sup>27</sup> 平成27年国勢調査(総務省統計局

<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka.htm>)

<sup>28</sup> 静岡市ホームページ(人口減少対策

[http://www.city.shizuoka.jp/556\\_000195.html](http://www.city.shizuoka.jp/556_000195.html))

<sup>29</sup> 澤井陽介「社会に見られる課題を把握して社会の発展を考える学習とは」(文部科学省教育課程課・幼児教育課編集『月刊 初等教育資料』9月号 No.944 東洋館出版社 2016年8月 p.48, p.49)

<sup>30</sup> 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』4版(東洋館出版社 2011年8月 p.39)

<sup>31</sup> 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』4版(東洋館出版社 2011年8月 p.42)

<sup>32</sup> 『デジタル大辞泉』

(<https://kotobank.jp/word/%E4%BA%BA%E7%89%A9-538877%E3.83.87.E3.82.B8.E3.82.BF.E3.83.AB.E5.A4.A7.E8.BE.9E.E6.B3.89>), 新村出編『広辞苑』(第三版六刷 岩波書店 1988年10月 p.1257) から作成。

<sup>33</sup> 海野孝三郎著・森竹敬浩編『内外旅中見聞録～幕末・明治の世界と日本旅行風景～』(川島美津江 1998年12月, 森竹敬浩「世界にお茶を売った男」(『李刊 静岡の文化』66号 静岡県文化財団 2001年), 森竹敬浩『世界に静岡茶売った男～清水港から初の直輸出～海野孝三郎伝』(静岡新聞社 1993年10月), 森竹敬浩「日本茶の世界市場進出, その時代と人びと 直輸出に夢をえがいた海野孝三郎」(『茶道楽17号』静岡県茶文化振興協会 2001年9月), 増田幸月編『静岡懸紳士録』(政経春秋社 1960年), 『海野のものがたり』, 飯塚伝太郎編『静岡の人びと』(静岡市教育委員会 1974年3月), 『静岡人物五十年史』(暁印書館 1976年), 上野利三『日本初期選挙史の研究～静岡・三重編～』(和泉書院 2009年12月), 河原退蔵『静岡県再製茶業史』(静岡県再製茶業組合 1942年11月), 山田萬作『嶽陽名士傳』(長倉書店 1985年, 安倍郡教育会『郷土読本 No.2』(安倍郡教育会 1932年9月), 横浜税関調査保税部調査統計課『横浜港における貿易額ベスト10品目の推移～安政の開港から140年～』(横浜税関 2000年3月, 『横浜港外国貿易月報』(横浜税関), 川口國昭・多田節子『茶業開化 明治発展史と多田元吉』(全貌社 1989年8月), 窪川雄介編著『茶のすべて』(窪川雄介 1997年4月), 前掲『お茶王国しずおかの誕生』

<sup>34</sup> 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』4版(東洋館出版社 2011年8月 p.39)

<sup>35</sup> 静岡市教育委員会『静岡市小学校社会科副読本「しずおかだいすき」』第五版(平成27年4月 p.174)を含む, それ以前に発行のもの。

【連絡先 大西 洋 E-mail: lupinthe3@384.jp】

# One Consideration of the Social Studies Area Teaching Materials Development that Set “A Social Phenomenon to Become the Nucleus of the Unit” : From the Concrete Instance of the Shizuoka Tea Direct Export of Kozaburo Unno who Urbanized Fourth Grader, Shizuoka-City in Modern Times

Hiroshi ONISHI

*Cooperative Doctoral Course in Subject Development, Graduate School of Education,  
Aichi University of Education & Shizuoka University*

## Abstract

This study is intended to suggest one process about local teaching materials development in the elementary school social studies education. I grasp the power that you should acquire from elementary school course of study commentary society, and scientific grounds and “the nucleus of the unit and the social phenomenon that it is” with the problem social, to be seen set the nucleus of the concreteness-like unit and the social phenomenon, unit aim that it is, and the summary ties the nucleus of the unit to a unit design, the development. In the example to speak in this report, I perform the setting of “the person” in addition to this. Because the example that the unit to need the local teaching materials matched each area is not listed to a textbook, the development is necessity. The word this “social phenomenon to become the nucleus of the unit” is a device of the writers, but the place that can express the social phenomenon to be connected directly with to learn at the unit with the number of in accuracy and the letters that there is few it plainly is new. It was a unit to need the local teaching materials to set this and inspected that I could perform the teaching materials development that “the power that you should acquire” in conformity with the course of study was attached to.

This “social phenomenon to become the nucleus of the unit” thinks that any unit of elementary and junior high school social studies is settable as well as local teaching materials development. The future problem is to inspect it.

## Keywords

Learning to Grasp Local Teaching Materials Development, A Course of Study,  
The Concrete Instance of the Ancient People who Devoted Themselves to Local Development,  
The Nucleus of the Unit and the Social Phenomenon That It Is,  
A Problem Social, to Be Seen, and to Think about Society